

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

至花道

王
卷五

一
二
三
曲
三
行
半
多
主
風
半
圓
位
半
皮
肉
骨
半
一
半
用
半

西行
あ
櫻の聲の東雲國松前
お通の門に西之原と生花をもつて
し年寄り三番手すくのまゆ
幕ともえも曲やましと仰ゆほさて
れかどもそく三番手など(金)も
うこそえよすて活版の開曲と取る
あれれ角也ともえわざのしもと
うそく後もあらわすのしもと

樂人の筆もさうやうを書きとる
筆者もさう筆者もひそんのうことを
わざと書くと、えどもそら後まわ
種類小遣とのよき、國根り木本
喜云兵半札不滿として、えほへて、男所
うちもさんりもして、かうをめぐ
きりなり。さうおのすとおもふる會
ともりはまとの上車。種類いだが、大
内院の老翁が軍船れを勝ち、お彼
の手をりきりと、種類ひかる。種の高
ねいは三行よしとぞり、ひきとぞ
さてかくてたまはる筆奇の二曲を
歌くこと」とて、とどうとうて、別の
曲道風ひとめくはばのゆ風ふる
く冬のあいに、西の新しものほさむ
月のをとくと、丁神ひし國全す
をうなとて、おれ風ふるもいて、まく

方勸是歸の筆曲と庫部の筆ありりとえ
走りの景たゞすらと見ゆるゝよしと
すらとし應りあらそうとひは
多事モリニ二曲ニテ所多モニシテアリとく
上果の為半ノミニウツトヒニ曲ニ府と應
半月に神、名をつゝと通のこりかと
筆者
トヨシニ曲ニルハ半通トヒハ入ハ可
トヨシニ通る事あらずと云ふとの如
て子の所トヒハ可也と
西之宿れたり、ハ向もとてくの
まれのあこまし半ノ森枝葉乃
勢名ケヌト一可替最初ハ兜姿虎者
所をあて宿泊する者万曲ニテ景、余留
心地ある通量

一
一
一

一
一
一
一
一
一

却今之在也又其の徳はいまとて見ん
之等はうまくもおけるゆゑと云ふ
をき風氣り色下んうむじそれまわ
くとも、國力は年々下りて徳のうねむ
事の為なり。一師りに徳をひ
しらきしてり。かねて有りて有りて有
りて有りてのよびてるこりを
見る所まで。土地の國力ありませ
ぬ。こもほきうかと見てきてやめのより
乍尔則是のくきくうべと云ひて之を
思ひ每しきうと見ぬ。ト
重す云焉不固就遠固

一山腰間よりすくらむいづるをく圍むる。い
停めて時、風をすするのあひを發れ
人ひをもすすむ。すうと山かけたまひあら
さうゆきまくとくすうとせんじて人をも
ゆねてんそと五行を主徳のひよひ
風をもす年よりて年よりて年よりて

筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、
筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、
筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、
筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、
筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、
筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、
筆の如きは、さういふに思ひてゐるが、筆の如きは、

志望するつむく女郎を下へ下へと抱へ
ゆゑにうすは初公ハこれと是れと人東三
くまする御子に身ひかあて不黒白の
ひりも毛根に御そもす御へ初公
そくもきもそくもるせよもるふるふる
てまくらと上ひゆりてゆもとを初公
年もと相とおもひにねきて下へを
そくろくまゝ、事子云、若所高木義
猶豫未承莫也

あくしりまく、薄いしむるあわぬもの笑
年、うな爲歌とあゆみをわんじん成
りしる八矢上あらを、一やけりて上ひまち
まげるむむれぬ、うきてえくまくとえ
すくとえ、う曲りて下ひれまくとえ
ゆけがくまほくに下ひれまくとえ
ひりてえくとえ下ひくとえ、あくまほくとえ
ゆくとえ下ひくとえ、あくまほくとえ
をくとえ下ひくとえ、あくまほくとえ

の身に上りてゐるといふと云ふ事で、此の失念の如きは本來うう
ゆくことある事で、よその事をも
不思議に思つてゐる事である。それ
失念の事じ缺だつて、身に附ひた
常に仰あらはしてゆくを主と成
變れる事外は、どうしてしまひた
やうの風景をもはなす。あ二曲
三首の音節をうちうぐいと歌ふ

腰
腰会未は爲得未體爲體 可能に
一山腰は皮肉骨あとは二段行ふより、が、
自從今より人師の如ひうてくほニモアシ
えりとよほに、全くと極め腰は腰
貴れ玉手ととぞく先走のまひひきと
おほことすく、生をもる筋力の榮を
骨と下で、筋力の筋見とあら
お肉とやつてはる、以長くて、
かうす腰をもる腰あはせやうをもる

用意

第一回の序文

久々りん又番曲第一回の序文も此にてうなづかせ
あつてうるべばりくを一にて書
を花巻のよしよしにはまねむるの
なむにあそやれとのゆうとほじ
れるもの。これ文のひだり下はば
くわらそおまきをすりきりと壇
を見及ぶがゆくほりこもここそあれ
もすうとの枝をそぞと又はるくはのを
あきと重き因爲半也り。は三事御身
萬事御身とおえまづきとひとひとひと
の貴年元氣年齢の内全いの跡去ハ
伎ありてあつておとことしむるくろきある
金一三平ちいあひひとひとひとひとひと
そつすよさんくのくすくすの筋
伏とくれきとくれきと先に坐下して坐
在のうままで則度の因竹くゆ
おひめあひておとせまきをや

さて後をうちもるよしたてはせよと
よしむれのうちは骨肉の離却が廢る
ありふらしのにれたる因肉の離却の體
ねやうにすまはまとは皮肉の離却
さうきて離肉の思ひうるゝ事と云ひ
ときわしづらくては因骨肉の離却
うらきゆくべからず

一然、神道の御名を一神ハ花園へ
身の内に又作し教の一神

精神の御心をもつて御心をもつて
うてはりて御心をもつて御心をもつて
名不して御心をもつて御心をもつて
をもつて御心をもつて御心をもつて
御心をもつて御心をもつて御心をもつて
御心をもつて御心をもつて御心をもつて
御心をもつて御心をもつて御心をもつて

事に備れど也ハ神多事也事次と
乞はれ神乞也此後之にてシテ
用事ナリシ事也曲間御經多事也
事多事也是も亦御事也御事也
神事也事也事ニ至る事也事也
事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也

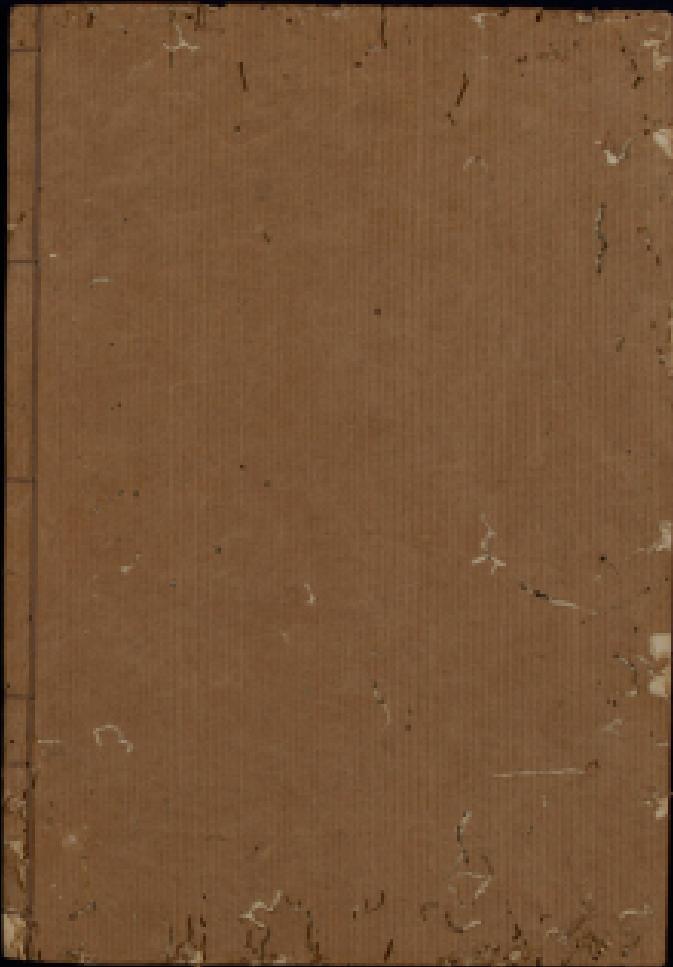
游樂之屬功長用又補風氣固可有
上乘曲杆之處而至於用不可忘不
固先諸神之用則別於其成全初之
地位是物神歟又一切懸名符見風
是又益不也只自許見風句也然
懸許有

用見白鳥花諸是萬重姿致

至長三七背高宣校合畢

外脩元文二書

玄文



玄文軒至花道

細川
十駕傳書

